


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根岸雅史 

学位申請者 松崎 武志

論文名 *Research into the Role of Dialog Recitation in the Foreign Language Classroom — Its Effectiveness in Facilitating Memorization and Formulaic Speech Production*

結論

松崎武志氏から提出された博士学位請求論文 *Research into the Role of Dialog Recitation in the Foreign Language Classroom — Its Effectiveness in Facilitating Memorization and Formulaic Speech Production* について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は根岸雅史を主査に、副査として、高島英幸教授、吉富朝子教授、望月圭子教授に、外部よりマーク・ピーターセン教授（明治大学）を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、第二言語習得における Formulaic Sequences（すなわち、記憶内に独立して保持されている一続きの言語情報〔以下、FSs〕）の役割を考察し、役立つことが期待される FSs を含むダイアログ集の暗記と暗唱タスクを日本の大学英語授業において一学期間に渡って与えることの効果の検証ならびに論考を行っている。

第1章では、本研究が FSs の指導を扱った背景として、言語使用の多くは定型的だが外国語学習者により産出される FSs は母語話者が産出する FSs のようにならず、またはなりづらく、そのような FSs の使用は解釈する側に負荷を与えることが指摘されている。また、文章暗記による FSs の指導に本研究の焦点が当てられた理由として、第二言語習得研究における文章暗記の研究が不足していること等が挙げられている。

第2章では、FSs の特徴、言語チャンクの処理、そして、大人の外国語学習における示唆が論じられている。FSs の特徴としては、3側面からの二分化（すなわち、統

語面での制約の有無，構成単語による意味の明示性の有無，そして「メッセージ発信」と「認知負荷の軽減」という区分け）により説明されている。言語チャンクの処理については，「言語処理は原則的に言語チャンク知識によって行われ，分析的言語知識は必要時に発動されるが普段は迂回される」という二重処理モデルが説明されている。大人の外国語学習については，大人は子供と異なり円滑なコミュニケーション遂行のための認知負荷を背負いながらの学習となること，そして，外国語環境ではインプット量とアウトプット機会の制約のため母語習得で見られるパターン学習は難しくなることが論じられている。

第3章では，言語理解と産出，ならびに，認知科学の観点から見た情報処理と学習について論考されている。言語理解と産出については，相互関連している3つの知識体系，すなわち，言語知識，コンテキスト知識，スキーマ知識のモデルが説明され，この点に関しては，大人の言語使用者による既知のコンテキスト知識とスキーマ知識への依存，そして，その依存が外国語学習での言語知識の発達に及ぼす影響について述べられている。情報処理と学習については，気づき，注意力，そして，ワーキング・メモリについて多角的に論述され，本研究を解釈する上でのキーフレーズのひとつ，transfer-appropriate processing が説明されている。第二言語での FSs 習得を困難にする言語特性についての考察も加えられ，それまでの論考を踏まえた言語処理・習得の統合的モデルの提示と，このモデルの含意の説明がなされている。

第4章では，次章以降で報告される本研究の導入として，前章までの議論を踏まえた3つの問題点について考察がなされている。3つの問題とは，【1】「特に大人を対象とした外国語環境で FSs の指導をすべきか」，【2】「指導すべきである場合，どのような FSs を教えるべきか」，そして【3】「どのように FSs を教えるべきか」である。これらの問題に対して，前章までの議論に鑑みながら，それぞれ，答えが多角的に論考されている。とりわけ，問題3については，多様な指導アプローチの効果や注意点が述べられている。本章の最後では，本研究のテーマとなっている文章暗唱の指導効果に関する主要な先行研究のレビューが行われている。

第5章では，第4章で挙げられている文章暗記に関する先行研究の不足点を踏まえ，まず，本研究における以下の5つの研究課題が挙げられている。【研究課題1】指導開始前に準備しておいたダイアログ集の全文暗唱あるいは部分暗唱を促すことにより，一学期間，暗記作業に従事させることができるか。【研究課題2】課題1で示した全文暗唱と部分暗唱指導により，FSs を用いたスピーチ産出を促すことができるか。【研究課題3】課題1で示した両方法により1分間当たりの産出音節数で計測するスピーチ流暢さを向上させることができるか。【研究課題4】両方法により，コ

コミュニケーション力を伸ばすために文章暗記をすることに対する学習者の態度をより肯定的に変化させることができるか。【研究課題5】両方法がどの程度機能するかについて、どういった個人差が影響を及ぼすか。本章では続いて、研究方法の詳細が記述されている。研究参加者は、処置群1 (TG1)11名、処置群2 (TG2)12名、対照群 (CG)11名の計35名が本研究に協力した。暗唱用 FSs は、事前に語数合計が3,182となるダイアログ集が準備されていた。著者による TG1 と TG2 の指導では、各授業の3分の1以上の時間が次の活動に充てられた。まず、著者がダイアログ集から順番にいくつか、文法、語彙、発音等の指導を行った。続いて、各学生は、導入済ダイアログいくつかをその場で覚えるか、予習で覚えてきたものを再確認した。次に、学生同士で暗唱を行った。TG1 と TG2 の指導法における最大の違いは、前者には各ダイアログの全文暗唱を課し、後者には特定の FSs 箇所のみ覚えれば済む部分暗唱を課したことであった。よって、部分暗唱群は、全文暗唱群と比較して約3分の1のテキストを暗唱することになった。採取データは、指導開始時と終了時には英語のスピーキングテストが実施され、日本語によるインタビューおよび選択肢形式アンケートの調査も行われた。CGにも、同一のテスト、インタビュー・アンケートによる調査が実施された。

第6章では、処置群によるダイアログ暗記、および全群のスピーキングテスト・アンケート回答の統計データが提示されている。処置群によるダイアログ暗記は、TG1、TG2 いずれも効果的になされたことが示されている。テストの Part 1 (短文音読タスク) では、両処置群が CG に対して得点の有意な向上を見せ、TG1 はさらに TG2 に対しても有意な伸びを示している。テストの Part 2 (短文回答タスク) では、学習したダイアログ表現をそのまま再現すれば済む項目では両処置群が有意な向上を見せているのに対して、回答の適切さについては TG1 のみが有意な向上を示している。テストの Part 3 (長文回答タスク) では、ダイアログ集にある FSs の使用については CG のみ有意な向上を見せており、1分当たりの産出音節数で計測する流暢さについては TG2 のみ有意な伸びを示している。指導開始時と終了時に設定したアンケート項目については、いずれも有意な変化は見られていない。最後に、指導終了時にのみ設定したアンケート項目については、「様々な言語項目を学習するためにテキスト暗記学習をすることへの好意的な態度変化」に関する項目において TG1 の回答値が CG を有意に上回るなど、いくつかの項目において群間に有意な差が見られている。

第7章では、第6章で提示された統計データに言及しながら各研究課題への議論が展開されている。課題1については、全文暗唱、部分暗唱のいずれもが一学期間に及んで暗記作業に従事させ得ると結論づけられている。課題2については、全文暗唱の

方が部分暗唱よりも効果的に定型表現によるスピーチ産出を促すと結論づけられている。課題3に関しては、1分当たりの産出音節数で測る流暢さについて部分暗唱群に有意な伸びが見られたが、全文暗唱群が流暢さを犠牲にして産出内容に注力を傾けていた可能性が指摘されている。課題4については、全文暗唱のみ、アンケート回答において、文章暗記に対する肯定的な意識変化が有意に見られたことから、全文暗唱アプローチを採用する動機となりうると考察されている。最後に課題5については、スピーキングテストにおける得点伸びの上位3名、下位3名が各群から選ばれ、彼らのテスト結果、および、アンケートとインタビューによる回答を交えながら1名ずつ分析が試みられている。結果、様々な個人差がテスト結果、アンケート回答に影響を及ぼしていた可能性があるかと推察されている。

第7章の結論部分では、本研究におけるデザイン上の問題・反省点、例えば、研究参加人数が少なかった点、スピーキングテスト、アンケートの信頼性を十分に高められなかったことが述べられている。また、教育現場への示唆として、「暗記指導を成功させるうえで大切なのは、学習者の目的に応じたテキストを提供し、学習者のレベルや指導の目的に応じた覚え方をさせることである」との主張がされている。最後に、未着手のFSs研究領域、例えばFSsタイプ別のデータ採取と分析、そして、本研究のデータ分析過程で新たに見つかったFSs指導の研究領域、例えば、暗唱の時間設定による認知負荷を操作した研究などが今後の研究課題として挙げられている。

審査の概要及び評価

審査委員より高い評価を与えられたのは、以下の5点である。

1. 理論的に Formulaic Sequences (FSs) の特徴および処理と習得について包括的にまとめ、かつ、言語知識、処理、(特に第二言語の) 学習についての統合モデルを提示した上で、日本の大学英語教育における文章暗記指導という具体的な実践に関する言語教材の開発および暗唱手法の検証と提案を行っている。
2. 音声による産出データを豊富に採取して分析するなど、文章暗記指導の先行研究に欠けていた点で成果を挙げている先駆的研究となっている。
3. 調査方法において、松崎氏自身も指摘する改善点は見られるが、スピーキングテスト、アンケート、インタビューによって多角的で大量なデータを採取し、統計処理はノンパラメトリック手法を駆使して3群の比較を試みている。
4. 研究参加者のそれぞれ計約15分に及ぶ英語の音声による産出データならびに約5分の日本語インタビューデータをすべて書き起こし採点を行い、学習者の英語力と態度の量的・質的分析を多面的に行っている。

5. FSs 指導に関心のある言語教師，そして FSs を研究テーマとしている研究者にとっての FSs 指導に関する新たな具体的知見を提示している。

最終試験の質疑応答において各委員から出された主な指摘ならびに質問とそれらへの学位申請者からの回答は以下の通りである。

1. 対照群の授業でも暗唱が行われていた。暗記対象は本研究用に準備されたダイアログ集ではなかったが暗唱自体は行われていたことを踏まえると，この群は対照群として適切かとの質問があった。この質問に対して，他に対照群を設定することが難しかったこと，および，対照群の授業では確かに暗唱も行われていたが，それは授業の主な活動ではなかったとの回答がなされた。
2. 処置の事前と事後にデータ採取がなされていたわけだが，事後のデータ採取時に不在だった学生を分析に含まなかったことは抽出方法として問題があるのではとの指摘がなされた。この指摘に対しては，本論文内でも触れられている点として，指導期間の最後まで残らなかった学習者を追跡して分析することは今後の調査の課題であるとの回答がなされた。
3. 「第二言語の自然習得における FSs 学習」と「本研究で設定された外国語学習での FSs の暗唱学習」の本質的な違いについて，また，その違いを踏まえた今後の実証研究の可能性について，見解が求められた。まず，本質的な違いについては，transfer-appropriate processing の観点から，自然言語習得では通常の言語処理を通じて「使える」言語知識が長期記憶に蓄えられていくのに対し，本研究における言語処理は擬似的なものであって限界があるのではないかとの回答がなされた。今後の実証研究の可能性については，自然習得における分析的言語知識の蓄積・発達が長期記憶にある言語チャンク知識をベースとした確率論的分析によって起こるのに対し外国語学習環境ではそういった自然習得のような学習は十分に起こらないとの理論に立脚すると，今回の暗唱群（特に，全文暗唱群）は暗記に際して彼らが既に有していた目標言語知識を総動員し，その結果として，自然言語処理の場合とは異なる形の分析が起こっていたと推測され，この点に関して，具体的な実証法は考案段階であるが追究していきたいとの意向が述べられた。
4. 本研究では YouTube も使ったとのことだが，異なった学習下での影響についての議論もあってよかったのではとの指摘がなされた。これに対して，本論文では扱われていないが，本研究用に準備したダイアログ集の半分は動画撮影したもので残り半分は音声のみ収録してあり，この違いによる FSs の暗唱学習効果の違いについて分析中であり，次期論文で発表予定との回答がなされた。

5. 上で触れられている言語知識の総動員について、言語パターンの内在化がある程度進んでいる学習者にとっては部分暗唱よりも全文暗唱の方が取り組みやすかったのではとの質問がなされた。この質問に対しては、本研究に参加した学習者らは既に相当の目標言語知識を有していたとも考えられ、今後、初～中級の学習者を対象とした調査もしていきたいとの回答がなされた。
6. どのような基準でこのテキストにある FSs が選ばれたのか、また、暗記する情報の「量」に重きが置かれているように見えるが大切なのは情報の「質」なのではとの質問がなされた。前者の質問に対しては、学位申請者の留学経験をベースとして、多くの英会話テキストの横断的な精査も加えてターゲットとすべき FSs が抽出されたとの説明がなされた。この説明に対しては、審査員より続けて、教材の客観性を高める工夫をすべきとの指摘がなされ、今後改善すべき課題のひとつとしたいとの回答がなされた。後者の質問に関しては、どういった情報が暗記するに値するかという「質」の問題は取り組む学習者のレベルであったり目的であったりに応じて異なることが本論文内で指摘されているとの回答がなされた。
7. 先行研究の概観では理論的枠組の説明が十分になされ、モデルの提示もあったが、調査結果を受けた理論面の議論がもっとあっても良かったとの指摘があった。これに対して、そうした議論も充実させるべきであったとの回答がなされた。
8. 研究の再現性の観点から、本研究で用いられたダイアログ集およびスピーキングテストは全て付録に含めるべきとの指摘がなされた。この点については、大学への論文最終提出の際に付すとの回答がなされた。

以上、学位申請者は各委員からの疑問や意見に対して、常に明確に応答ができており、他の細かな指摘・質問に対しても十分な回答を述べ、本論文の限界およびその改善方法についてもきちんと、今後の課題として理解していることを示した。いずれの質疑も本研究の質と量を揺るがすものではなく、より高次元の研究論文へ昇華させるための、また、より幅広い見識を持つ研究者となるための助言と考えられる。

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は外国語暗記指導の理論面および教育実践面の双方における優れた論考であると判断され、学位申請者は当該分野における学術的な寄与を成し得るだけの高い研究能力を備えており、将来にわたり研究者として学界に貢献する研究活動が期待されると判断された。また、非常に質の高い学術英語で書かれている点も高く評価された。したがって、審査委員会は、全員一致で、学位申請者に博士（学術）を授与することが適当との結論に達した。